

下請け体質から 脱却した新たな 「都市型ものづくり」

「Garage Sumida」設立から11年、
開発・設計関係が売上の7割を占める

株式会社 浜野製作所

取締役社長 小林 亮 氏

代表取締役会長 浜野 慶一 氏



東京都墨田区の(株)浜野製作所が2024年10月から、新体制へと切り替わった。31年間にわたって同社をけん引してきた浜野慶一氏が会長に、42歳の小林亮氏が社長に就任した。

同社は東京の大田区や墨田区など、ものづくりの集積地から中小製造業が姿を消していることに危機感を募らせ、中小製造業が直面するきびしい経営環境からの脱却を模索。自社の強みと東京の“地の利”を生かし、“ものづくりの情報の上流”からコミットすることによって「下請け体質からの脱却」と「都市型・先進ものづくり」への挑戦」に取り組んできた。

これまでの取り組みは多岐にわたるが、象徴的な

は2014年に立ち上げたものづくり支援拠点「Garage Sumida」だ。「Garage Sumida」では、2016年にはものづくりベンチャー支援事業を展開し、2017年にはリニューアルオープンして、インキュベーション施設としての機能を強化した。小林社長は、この「Garage Sumida」の運営責任者として、構想の段階から企画立ち上げ、運営までを手がけてきた。

そこで、小林社長と浜野会長に事業承継の経緯や、開設から11年が経過した「Garage Sumida」の現在、同社の今後の指針などについて話を聞いた。

■チャレンジを続けるためには新陳代謝が必要

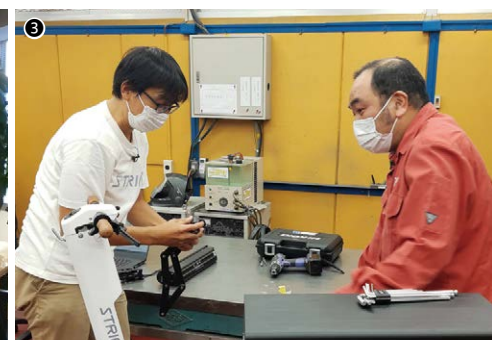
——2024年10月から新体制になりました。

浜野慶一会長（以下、姓のみ） 会社を取り巻く環境の変化が加速する中、小さな町工場がチャレンジし続けるためには、社内の新陳代謝が必要です。新陳代謝を促す最大のポイントは社長交代であり、若い世代に経営を任せることでしょう。

小林とは、彼が大学生のときからの付き合いです。一橋大学在学中に産業・地域振興の重要性について学んでいて、国内外の中小企業を視察しており、当社にも見学に来ました。

卒業後にエンタメ業界で5年ほど勤めた後、2012年に当社に入社。その後は経営管理・プロジェクト業務全般を担当してもらっています。「Garage Sumida」には構想段階から関わり、補助金・助成金の申請書の作成や社外向けコンサル業務なども行っています。

小林とはこれまで業務を通じていろんな話をして、同じ方向を目指していると感じています。「なるほどそう来たか」と感心する部分もあって、そうした若い優秀な人材に未来を託すことは楽しみでもあります。



①東京都墨田区にある㈱浜野製作所の本社板金工場兼 Garage Sumida／②「Garage Sumida」のワークスペース／③スタートアップと職人が直接コミュニケーションをとり、開発を進めていく

——米国の関税政策の影響、半導体市場の低迷など、見通しづらい状況が続いています。

小林亮社長（以下、姓のみ） 毎年年末に翌年の景気動向を予測していますが、今年は今のところ意外に予測から大きくはずれていません。株価はバブル状態がしばらく続き、いつ崩れてもおかしくない状態だったので、トランプ大統領になってから結構荒れるのではないかと考えていました。

今は、米国株は適正水準まで下がり、それにともなって日本の株価も下がってきている状態。平時より悪くなることはあるかもしれませんが、大体平時並みに落ち着くと思います。全体としては秋口ぐらいまでは先行きが見通しづらい状況が続くと見えています。

われわれのような規模の会社は、常に最悪な事態に備えておかねばなりません。中小企業は想定外の非常事態に耐えうるバッファが限られているからこそ、余剰資金の確保や事業ポートフォリオの分散が不可欠です。それでも突発的なパンデミックや地政学的リスクの変化はほとんど予測できませんから、有事の際にも臨機応変に対応できる機動力を備えておくことが肝要です。

2024年9月期が終わるタイミングで、個人的なマイルストーンを兼ねた中期経営計画を作成しました。さまざまな状況の変化を踏まえながら随時更新していく予定です。私はまだ自社のことで手一杯な部分があります。浜野会長には今後製造業のエバンジェリストとして、製造業界全体を見ていただき、ものづくり産業のために尽力していただきたい。

■開発・設計関係が前期比2倍に成長

——「Garage Sumida」ではスタートアップ企業や大企業の新規事業立ち上げ、研究開発支援などを手がけてきました。設立から11年が経ちましたが、現在の状況はいかがですか。

小林 「Garage Sumida」は、10年が過ぎてようやく軌道に乗り始めました。2024年9月期の「Garage Sumida」関連の売上は、前期の倍ぐらいになりました。売上利益は開発・設計関係が70%、部品加工が20～30%で、残りの数%を企画・サービス分野が占めています。案件あたり数千万～1億円単位の規模の大きい仕事も入ってきています。今期（2025年9月期）がはじまってまだ半年ですが、開発・設計関係だけですでに売上は7億円を超えています。

この10年ほどでスタートアップに挑戦する人が増え、支援機関を含めた外部環境も変化しています。さまざまなメンターや先輩ベンチャーの経験を踏まえ、スタートアップの事業成長を促す環境も整備されてきたように感じます。

当然、受注する仕事の中にはわれわれだけで対応できないものもあり、地方の同業者や異業種の事業者などとも連携

会社情報

会社名	株式会社 浜野製作所
代表取締役会長	浜野 慶一
取締役社長	小林 亮
所在地	東京都墨田区八広 4-39-7
電話	03-5631-9111
設立	1978年
従業員数	48名
主要事業	ロボット・各種装置・機械の設計開発、架台・筐体設計・製作、精密板金加工・レーザ加工、金属プレス金型設計・製作、金属プレス加工、切削加工・機械加工、複合加工、各種アセンブリ加工、ラピッドマニファクチャリング（3Dプリンター・レーザカッター・CNC加工・UVプリント・3Dスキャン・3次元データ作成）
URL	https://hamano-products.co.jp/



CORPORATE WEBSITE



①ファイバーレーザーマシンBREVIS-1212AJ／②パンチ・レーザー複合マシンLC-1212 C1NTによるブランク加工／③ベンディングマシンHG-8025による曲げ加工

していく必要があります。当社から仕事ををお願いしている取引先は海外も含めて延べ3,000社以上。年間を通じて取引がある企業だけでも200社ほどあります。

浜野 今までは、メーカーから同じ図面が複数社に送られ、見積り価格の一番安い会社が仕事を受けるという決定権ないステージで仕事を受けていました。地方であれば製品単価が安くても、大きな工場でマシンをフル稼働し、数量をつくることでカバーできますが、都市部では敷地面積や騒音問題などで難しい。そこで戦略的に、賃加工だけではなく、商品企画や開発・設計、事業の立ち上げ、場合によっては資金調達、コンサルティング業務も含む「ものづくりの情報の上流」から関与していく事業構造へと変革してきました。

われわれの規模だと、ものづくりに詳しい工場長のような職人はいても、事業戦略を一緒に考えてくれる人はなかなかいません。当社の場合は小林を筆頭にそうしたことを話し合えるメンバーが何人もいてくれたことが大きいと思います。

■若手をトップに据えた別会社も模索中

——研究開発を通じて出てきた知財の取り扱いはどうしていますか。

小林 スタートアップや大企業とともに研究開発を行う過程で、知財の問題が出てくる場合もあります。クライアントが持つコアテクノロジーや研究シーズを実装するための依頼が多いため、元となる技術はクライアントに帰属します。ただ、形にしていって過程で共同開発の要素が生じる場合には、開発契約を結んで貢献度に応じた知財の扱いを決定します。

個人的には、「Garage Sumida」はあらゆる相談を受けられる製造エンジニアリングのプラットフォームという役割を維持しつつ、知財を活用して特定の製品・サービスを事業展開する場合には別会社をしたい。そして、その分野に

熱意を持った人間がそれぞれの代表を務め、展開していった方が棲み分け的にも、発展性の意味でも良いと思っています。

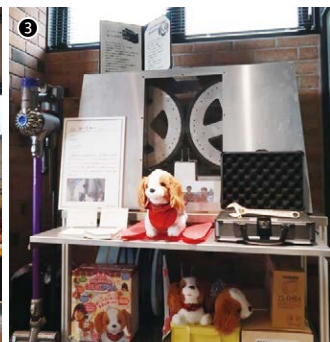
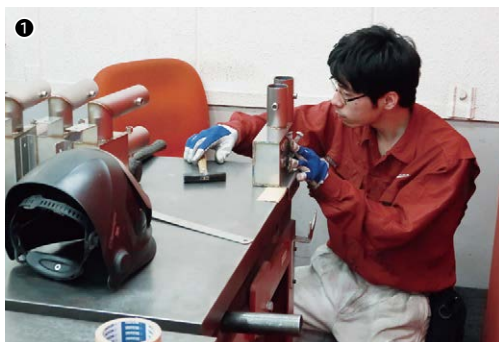
浜野 販売系かサービス系か、業務内容はわかりませんが、30代前半ぐらいの若手を社長に据えるなど、若い人たちにどんどんチャレンジしてもらいたいと考えています。しかし、ただ独立した企業にしまうと、すべてを自社でまかなわないといけなくなるので、ホールディングス化して採用や社員教育を共同で実施するとか、業務量の増減によって手があいた人材を貸し借りできるようにしたい。そうすることで単純作業だけを行う社員は減りますし、社員自身もさまざまな仕事ができるようになることで視野が広がります。視野が広がれば新たに気が付くことも増え、考えることで、新しいアイデアも生まれやすくなります。

■「日本の宝」になるポテンシャルを持った若手がそろ

——現在の従業員数はどのくらいですか。

浜野 社員は48名で、役員も入れると53名。平均年齢は30代です。今は「ともに新たな市場をつくっていく」という当社の考えに共感してくれた人しか基本的に採用していません。人数が十分足りているかと言えばそうではありませんが、当社の場合、大企業のエンジニアが出向に来てくれるなど、共創の枠組みの中で人材を確保しています。出向の任期後も、テクニカルパートナーとしてプロジェクトに関わってくれる場合もあり、案件に柔軟に対応することができています。

小林 われわれの特徴は実際のエンジニアリングをともなったコンサルティングができること。自分たちで設計したものを自分たちでつくるという「エンジニアリング」と「マニファクチャリング」の双方を近い距離感で進めていくことが、クリエイティブの源泉になっていると思います。



①溶接・仕上げ工程／②年頭所感や中間報告会など行われるコワーキングスペースの様子／③NHK BSのテレビ番組「魔改造の夜」の「トースター高跳び」回で製作した作品「Godster (ゴースター)」と「ワンちゃん25M走」回で製作した作品「特急あるみ」

開発設計部門のメンバーは現在12名で会社の中核になっていますが、今後もエンジニアは増やしていきたい。既存製品の改良ができる人はたくさんいますが、新しいものを生み出せるエンジニアは大企業でもそれほど多くありません。そうした人材でないとできない仕事だからこそ、われわれを頼っていただけます。

浜野 小林は42歳、宮地史也副社長は39歳、部長職も若手がほとんどです。人事労務の部長は30歳の女性で、6部署のうち2部署は女性が部長をしています。

設計開発部は高専出身の社員が多いです。昨年入社した社員も高専出身で、「大手企業に受かったけど、浜野製作所で働きたい」と入社してくれました。入社して3カ月ほど社内研修をして、4カ月目から先端領域関係の仕事をしています。その社員の教育に当たっている社員も20代後半の高専出身者です。ものづくりが大好きで優秀な、おもしろい若手が集まっています。

小林 まだ荒削りな部分もありますが、日本の宝になるポテンシャルを持ったメンバーがそろっています。そのポテンシャルをうまくエネルギーに変えていくことが私の役割です。

■「都市型ものづくり」を強化していく

——御社はこれまで、都市型・先進ものづくりを推進してきました。

小林 墨田区近隣では工場がどんどん減少し、アパートやマンションに変わってしまっています。その一方で、不動産デベロッパーやコンサルタントたちが企画運営するインキュベーション施設のような場所も増えています。

クリエイティブな活動では、知識だけでなく、実際にカタチにするプロセスが必要になります。東京はクリエイティブな活動をする場所が少ないため、工場にはまだポテンシャル

がある。クリエイティブな「創造業」に転換していけば、都市部の小さな工場でも生き残る余地はあると思います。

そのためには大手メーカーや研究機関、大学などのシーズをカタチにする場所が必要です。現在はそうした場所がないため、当社にご相談いただいておりますが、やはり規模が小さすぎる。資金力やパワーのあるアマダのような工作機械メーカーが協力して、ユーザーも巻き込みながら一緒に新たな事業や産業をつくっていく——それぐらい振り切れた展開をすることで、日本の中に産業を残していかなければいけないと思っています。

■時代に合わせてアップデートをはかり、クリーンルームを設置予定

——まもなく創業50周年をむかえます。今後についてどのように考えていますか。

浜野 さまざまな変化が起こる中で10年後、20年後、50年後まで見据えられるかといえばそうではありませんが、お客さまと向き合い、その時代を生きている経営者が考えていくべきことです。経営環境の変化に応じてその都度考えながら、最終的には浜野製作所のマインドを引き継いでもらえれば一番ありがたい。

ただ私も父親のマインドを引き継ぎつつ業務内容を変えてきましたし、今後も時代にに合わせて変わらざるを得ないと思います。そもそも当社はプレス金型の製作からスタートしました。量産品の生産拠点がどんどん海外へ移り、単価もきびしくなっていく中、「精密板金の仕事は国内に残る」という父親のアドバイスを受け、2000年に精密板金を始めました。今年は、プレス事業の見直しを行い、建屋の一部を研究開発用に変え、時代の変化に合わせて、宇宙関係の仕事に必要なクリーンルームをつくる計画です。